

## 日本語学術的テキストにおける主題－題述構造と 主題進行パターン<sup>1</sup>

### Theme-Rheme Structure and Thematic Progression Patterns in Japanese Academic Texts

阿 部 聡

ABE Satoshi

#### Abstract

In this paper, I will attempt to analyze Theme-Rheme structure and Thematic progression in Japanese academic texts from dynamic perspective. I will demonstrate that we can properly treat clauses that have multiple ideational Themes in each clause, which are often found in Japanese academic texts, by taking the dynamic perspective advocated by Ravelli (1995).

Firstly, a functional definition of Theme and its realization in Japanese are briefly reviewed and discussed. Secondly, the possibility of having multiple ideational Themes in a clause is considered from dynamic perspective. Finally, patterns of thematic progression in Japanese academic texts are analyzed to verify the idea of multiple ideational Themes by showing their functional differences in texts. We can conclude that unmarked Theme and marked Theme have different functions in Thematic progression.

**Keywords** : 主題、動的観点、伝達の単位

#### 0. はじめに

本論文では、日本語の主題－題述構造を動的観点から捉えることを試み、学術的テキストにおける主題進行パターンを分析する。動的観点から主題構造を分析することにより、観念構成的主題が節に複数存在するような例を扱うことも可能になる。節に複数の主題が存在する場合、それぞれ異なる機能を担うと考えられる。主題進行パターンの分析を通じてこの機能差について考察する。

なお、日本語の主題－題述構造の分析に関して、伝達の単位(龍城2004)、T-ユニット(Thomson 2001a)などが提案され、節という単位の不備が指摘されているが、本論文では他の言語における主題－題述構造に関する研究を参照することがあるため、便宜上「節」もしくは「文」という単位を用いる。

## 1. 日本語の主題－題述構造

### 1.1. 機能的定義

本節では、日本語の主題を機能的観点から定義する。

- (1) 主題は、節の解釈のための局所的コンテキストを提供する(Matthiessen 1995a: 531, Teruya 2004: 230)。局所的コンテキストとは、テキスト展開における意味生成からの出発点である(Matthiessen 1995a: 515)。

この定義に基づいて、日本語の節の観念構成的主題を捉えるならば、主に次の2つのタイプを想定することができる。

- (2) a. 先行談話との関連というコンテキストを提供する主題 (参与要素主題)  
b. 時間的、空間的コンテキストなどを提供する主題 (状況要素主題)

(2a)は主として、話題の中心軸(山口2000: 28参照)をなす参与要素が主題となるもので、過程構成の要素としては参与要素が主題となる。いわゆる話題的主题(topical Theme)と呼ばれるものである。それに対して(2b)は、状況要素が主題となるもので、時間的、空間的位置づけを表す。

### 1.2. 具現

つぎに日本語の観念構成的主題の具現について簡単にまとめる。日本語には「は」という主題マーカーがあることが指摘されている一方(Halliday & Matthiessen 2004など)、節頭位置という語順によっても主題を具現することができるとする説もある(Thomson 2001aなど)。本論文では、基本的には「節頭位置」によって具現されると考えるが、「は」が付与されることにも機能的な理由があると考ええる。

山口(2000: 30)は、日本語の主題の具現について、つぎのように述べている。

日本語でも、英語と同じように、節頭の要素に主題の機能を担わせることが普通である。そして多くの場合、主題の機能を担った要素は、助詞の「は」が付与される。

但し、「は」が付与されたものがすべて主題の機能を担うわけではないし、また、「は」が付与されていなくとも節頭に配置されることだけでも主題の機能を具現することが可能である。

主題の具現の可能性としては、(1)節頭配置+「は」、(2)節頭配置のみ、の2つが挙げられている。

### 1.2.1 節頭配置+「は」

主題の具現として多いものは、節頭要素に「は」が付与することである。たとえば、

(3)	すべての生物は	親から生を受け、生長し確実に子孫を残すための生活史上の特性を有している
	主題	題述

(3)のように節頭の参与要素「すべての生物」に主題マーカ―とされる「は」が付与されるのが典型的な主題の具現であろう。(3)は、参与要素が主題の機能を担っていた例であったが、次の(4)は状況要素が主題の機能を担う例である。

(4)	焼畑には	周辺の森から様々な植物の種子が運ばれる
	主題	題述

節頭配置を基本的な具現方法とするならば、「は」の付与は主題の具現にとって余分なものになってしまう。しかし、実際には上例のように、「は」を付与された要素が節頭に配置されるのが一般的である。ここで、「は」の機能について触れておきたい。

「は」の機能としては、Teruya(2004: 230)が “In Japanese, thematically marked constituents (nom. gp-wa, -mo etc.) can be taken as marking the end of the thematic peak unfolding from the beginning of the clause.” と述べているように、主題の境界を明示する機能を想定することができる。節頭に配置するだけでは、主題と題述の境界が明確ではなく、その境界を明示するには、主題の頂点が終わることを合図する必要がある。とりわけ、参与要素が主題となる場合は、題述に配置されている過程中核部との結びつきが強いため、「は」の付与なしに節頭に配置しても、主題とは見なされず、題述の一部であると解釈される可能性がある。

### 1.2.2 節頭配置

しかしながら、節頭に配置するだけで主題となる場合もある。それは、状況要素が主題の機能を担う場合である。

(5)	1990年代以降	メディアリテラシーという言葉が様々な場面において聞かれるようになってきた
	主題	題述

(5)の「1990年代以降」は、意味的には時間的コンテキストを提供していると捉えることができる。「は」の付与はないが、機能的観点からは主題と認めることができる<sup>2</sup>。

以上、「は」が付与される場合も、付与されない場合も、節頭の要素が主題として機能していると考えられ、節頭に配置することが日本語の節における主題の基本的な具現方法であると言えよう。

### 1.3. 有標性

日本語では参与要素主題がより無標で、状況要素主題がより有標である(Thomson 2001a: 129)。しかし、参与要素のなかでも有標性に差がある。それは、態voiceによる差である。主語である参与要素はより無標で、補語である要素は、主語である要素に比べて有標性が高くなる。すなわち、参与要素のタイプだけで有標性が決定するわけではなく、主語か補語かという違いが影響するのである(詳しくは、Teruya 2004: 230 のTable 4.9 “Marked and unmarked Themes across process types” を参照されたい)。次の(6)は、受動態で、主語は「地球の年齢に関するリテラシーは」という物質過程の対象であり、これが主題となっている。

(6)	熱力学で現れるエントロピーは	ある系が吸収する熱をそのときの系の温度で割って、えられた量を変化の経路に沿って積分したもの、ということでもまず習うだろう
	主題	題述

また、(7)では、態は能動態で、心理過程の参与要素、現象が主題となっているが、無標主題となるはずの感覚者は節に現れていない。この例では能動態ではあるが補語(受動態で主語となる要素)が主題となっているのである。この場合は、やはり有標性は高くなる。

(7)	地球の年齢に関するリテラシーは	年々変更されてきた
	主題	題述

以上の観察から、観念構成的主題の有標性についてまとめる。参与要素で主語であるものがもっとも無標の主題で、つぎに補語となるもの、そして状況要素がより有標の主題である。これを、Andersen (2004) にならって、有標性のclineとしてまとめるとすると図1のようになる。



図1 主題の有標性のcline

#### 1. 4. absolute Theme / Thematic Matter

absolute Theme とは、参与要素としての役割も状況要素としての役割も持たない主題で(Teruya 2004: 246)、テキスト形成的メタ機能内でのみ機能する主題である(Matthiessen 1995a: 552)。これには、(8)のように無標主題と同様の具現(節頭配置+「は」)がなされるタイプと、(9)、(10)のように「-について (は)」 「-に関しては」といった主題的事柄(Thematic Matter)によって具現されるタイプがある。

(8)	その結果成立する細胞である受精卵は	その細胞質は	殆どが卵に由来する
	absolute Theme	無標主題	題述

(9)	メディアリテラシーについては	海外の仕事の多くがすでに日本語に翻訳されるようになっている
	主題 (Thematic Matter)	題述

(10)	確実となっている実験結果とそれを解釈する理論については	知識として体得し 先人の知恵の上に立って次のステップを注意深く調査すればよいのである
	主題 (Thematic Matter)	題述

山口(2000: 30)は、こうしたテキスト形成的メタ機能内でのみ機能する観念構成的主題に

言及しており、「テキスト形式的機能に属する主題－題述構造が節の主要な構成原理となることがあり、生産性の高い構造であると言える」としている。

### 1. 5. aboutnessとスーブラテーマ

日本語の主題の意味的な定義として、「－について言えば」というaboutnessや話題という概念が用いられることがある(Fukuda 2003, 2006参照)。このaboutnessはすべての主題において観察されるものではない。例えば、上の(5)は「1990年代以降について」何かを叙述しているとはいえない。

しかしその一方で、このaboutnessを主題分析に積極的に用いていると見ることのできる研究もある。龍城(2004)の伝達的単位Communicative Unit (CU) によるテーマ分析では、「話題」を提示する要素がテーマとされ、伝達的単位全体に影響を及ぼすテーマをスーブラテーマと呼ぶ。

伝達的単位を用いてテキスト解釈を行うと、最初に「話題」を提示する要素が提示され、このテーマをみると、その意味作用が及ぼす範囲はピリオドを超えて機能していることがわかる。日本語話者はこのようにピリオドを超えたまとまりのある単位(CU)の中で、それを構成している構成素の前後関係からその内容をいかに伝達するかを決定しているのである。この前後関係とはHalliday のいう「結束性」にも通じる概念であり、この結束性によって構成されたひとつの構成単位が「伝達的単位」と呼ばれる単位である。(龍城2004: 5)

主題が「話題」性やaboutnessを表すのは、おもに次の場合であると考えられる。

- (1) a. 主語＝主題（無標主題）の場合
- b. absolute Theme, Thematic Matterの場合

(11a)については、主題が「叙法上の責任modal responsibility」(Martin 1992: 461-489)を担う要素としての主語である。主語は「議論の要点the nub of the argument」(Teruya 2004: 204, Halliday & Matthiessen 2004: 120)、「議論の対象となる事柄Matter of Argument」(Davies 2004: 97-102)として機能し、これが主題となると、「－について」というaboutnessが生じる(山口1998、Fukuda 2004: 73、Davies 2004参照)。龍城(2004)の分析例でスーブラテーマと認定されているのは、多くがこの無標主題であると思われる。

(11b)は、長沼(2001: 118)が指摘しているように、トピック－コメント構造（話題－評言構造）に近いものであろう。

## 2. 動的視点：複数の観念構成的主題を認める立場

本節では、Ravelli (1995) により提案されている、動的視点dynamic perspectiveによる主題分析を日本語の主題分析に取り入れることで、観念構成的主題が一つの節に複数具現される例の分析が可能になることを示す。

### 2.1. 動的視点と静的視点

これまでの主題－題述構造の分析は、多くが静的視点synoptic perspectiveからの分析であり、Halliday & Matthiessen (2004: 85) の英語の主題－題述構造の分析のように「経験構成的要素のうちの1つ、しかも1つだけが含まれる」(日本語訳は山口・寛2001: 76から引用) という基準を用いている。Thomson (2001b) の日本語の分析も、この基準にしたがっていると言えよう。

(12)	福井県警の調べでは	(i) <u>犯人</u> は身長175センチくらい
		(ii) 灰色のシャツを着ており
		(iii) 白い登山帽をかぶっていた
	主題	題述

(Thomson 2001b: 59の分析に基づき、筆者が再構成。「犯人は」に付した下線は筆者によるもの。)

このように、Thomsonは、「福井県警の調べでは」のみを主題とし、主語である参与要素に「は」が付与された(i)の「犯人は」を題述に含めている。しかし、この「犯人は」という無標主題は後続する(ii)と(iii)の2つの題述にとっても主題として機能していると解釈できる(→【犯人は】灰色のシャツを着ており／【犯人は】白い登山帽をかぶっていた)。

機能的定義からすると、この「犯人は」も主題としてみなすことができる。龍城(2004)の言うスープラテーマとして機能しているからである。このように観念構成的主題が二重に具現される例を適切に分析するには、動的視点が必要となる。

Ravelli(1995: 196)はテキストが展開するにつれて可能になる言語の選択を説明するために動的視点をとる、としている。テキストインスタンスに即した分析を行うには、この視点が不可欠である。動的視点による分析では、実際の意味生成の過程における選択の経路を捉える。選択の経路は継続される場合(sustain)と、閉じられる場合(close)とがある。Ravelliは、これを英語の主題－題述構造の分析に応用し、主題の境界の範囲について論じている。



- (13) and there this morning protesters gathered again after dawn...

(Ravelli 1995: 223. 下線は筆者による)

(13)の下線部が主題である。‘and’ というテキスト形成的主題が、主題選択の経路を「開き」、主題選択経路が、対人的主題または観念構成的主題によって継続されることを予期させる。次の ‘there’ は、経験構成的主題で、静的観点での分析であればここで主題選択経路が閉じ、主題の境界が設定される。しかし、動的観点では、主題選択経路のこの時点ではまだ他の観念構成的要素が後続する可能性があると捉え、主語にまだ到達していないことから、「メッセージの出発点」はまだ完全には拡充されていないと捉える。さらに、‘this morning’ という状況要素が後続し、ここでも主語に到達せず、主題選択経路は閉じず、継続する。次の ‘protesters’ は、参与要素かつ主語であることから「メッセージの出発点」が十分に拡充されたことを示し、ここで主題選択経路が閉じられる。主題選択経路が閉じられたことにより、ここで主題と題述とのあいだの境界が設定される(以上、Ravelli 1995: 225による)。

このように、動的観点では、観念構成的主題を複数認める分析が可能となる。以下では、この観点の日本語分析への応用を試みる。

## 2. 2. 二重主題

(14)は、「は」によってマークされた主題が、1つの節に2つ具現されている例である。

- (14) 古代日本の都（みやこ） 観には自然から分離した都市という考えはまったくない。

まず、「古代日本の都（みやこ）観には」は、節頭に配置された要素であり、主題選択経路を開く。これは観念構成的主題であり、状況要素である。「は」によって主題の境界が明示されてはいるものの、この後に無標主題が続くことが予期されている。つぎに「[[自然から分離した都市という]] 考えは」という主題が現れ、主題選択経路が継続される。これが主語に当たるものであり、無標主題と考えられる。ここで主題選択経路は閉じられ、主題の境界が設定され、これ以降は題述となる。

では、(8)のようなabsolute Themeの場合はどうなるだろうか（以下に(15)として再掲）。

- (15) その結果成立する細胞である受精卵は、その細胞質は殆どが卵に由来する。

「その結果成立する細胞である受精卵は」という節頭の要素が主題選択経路を開始する。この主題は「名詞群+は」によって具現されており、見かけ上は無標主題のようである。「は」



があることから主題選択経路は閉じられて主題の境界が明示されると思われるが、つぎに「その細胞質は」という「名詞群+は」が現れ、主題選択経路は継続される。このあとには主題となりうる要素は続かず、ここで主題の境界が設定される。この2つ目の主題は厳密には主語とは言い難いが、無標に近い主題であり、これ以降は題述となる。

このように、動的主観から主題－題述構造を捉えることにより、実際のテキストにおいて具現される二重観念構成的主題を適切に分析することができる。しかし、二重主題を認めることに機能的な理由はあるのだろうか。観念構成的主題が2つ具現されているのであれば、それらの間には何らかの機能差があると考えるのが妥当であろう。以下では、主題進行パターンの分析を通じて、主題の機能差について考察する。

### 3. 主題進行パターン

本節で主題進行パターンと呼ぶのはDaneš(1974)のThematic Progressionに由来するもので、本節では山口(2000: 29)の主題選択パターンを参考に図2に示す。

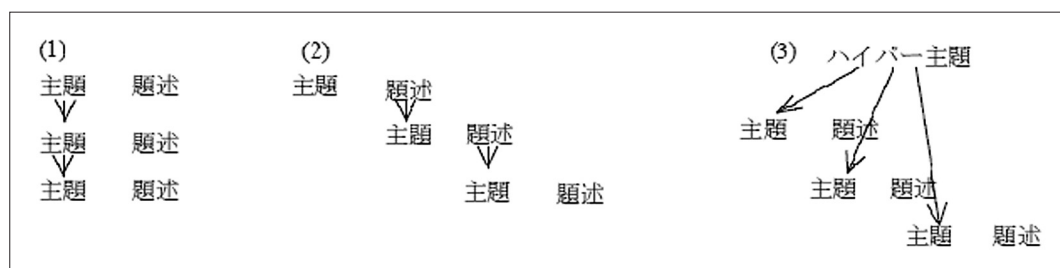
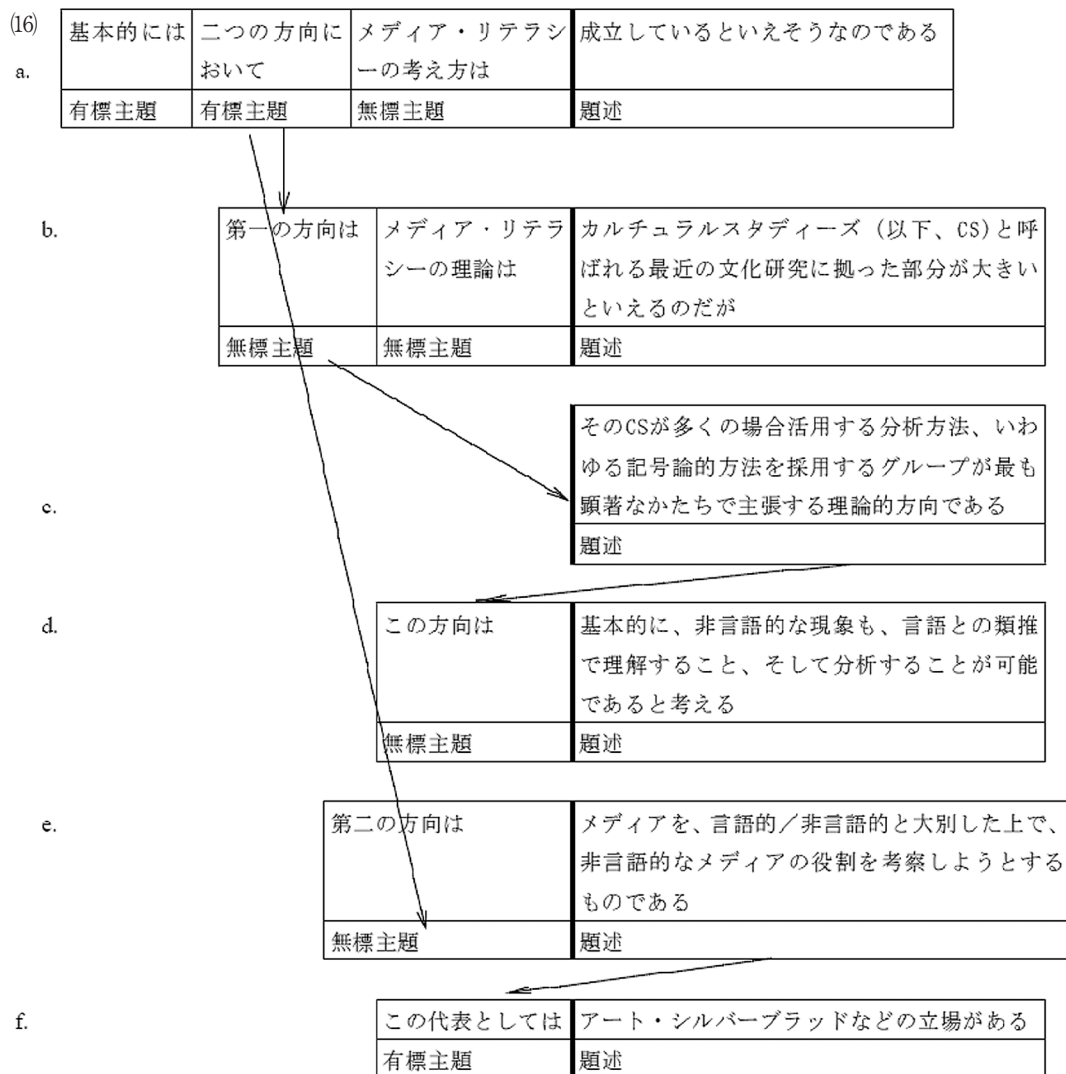


図2 主題進行パターン

このように、(1)同一主題が連続するパターン、(2)題述→主題という線状パターン、(3)ハイパー主題から各節の主題が派生するパターンの3つの基本パターンがある。

(16)は、(a)の有標主題「二つの方向において」が(b)「第一の方向は」、(e)「第二の方向は」という無標主題を統括している。単純に同一の主題が連続しているわけではないが関連する主題間の進行が見られ、談話の構造化をはかるための主題進行であると言えよう。それに対して、(a)の無標主題「メディア・リテラシーの考え方は」は、後続する節に対して必ずしも主題として関連を持つわけではないが、龍城(2004)のスーパーラテーマに近いものであり、話題を提示し、以降の節全体の展開の中心となっていると考えられる。



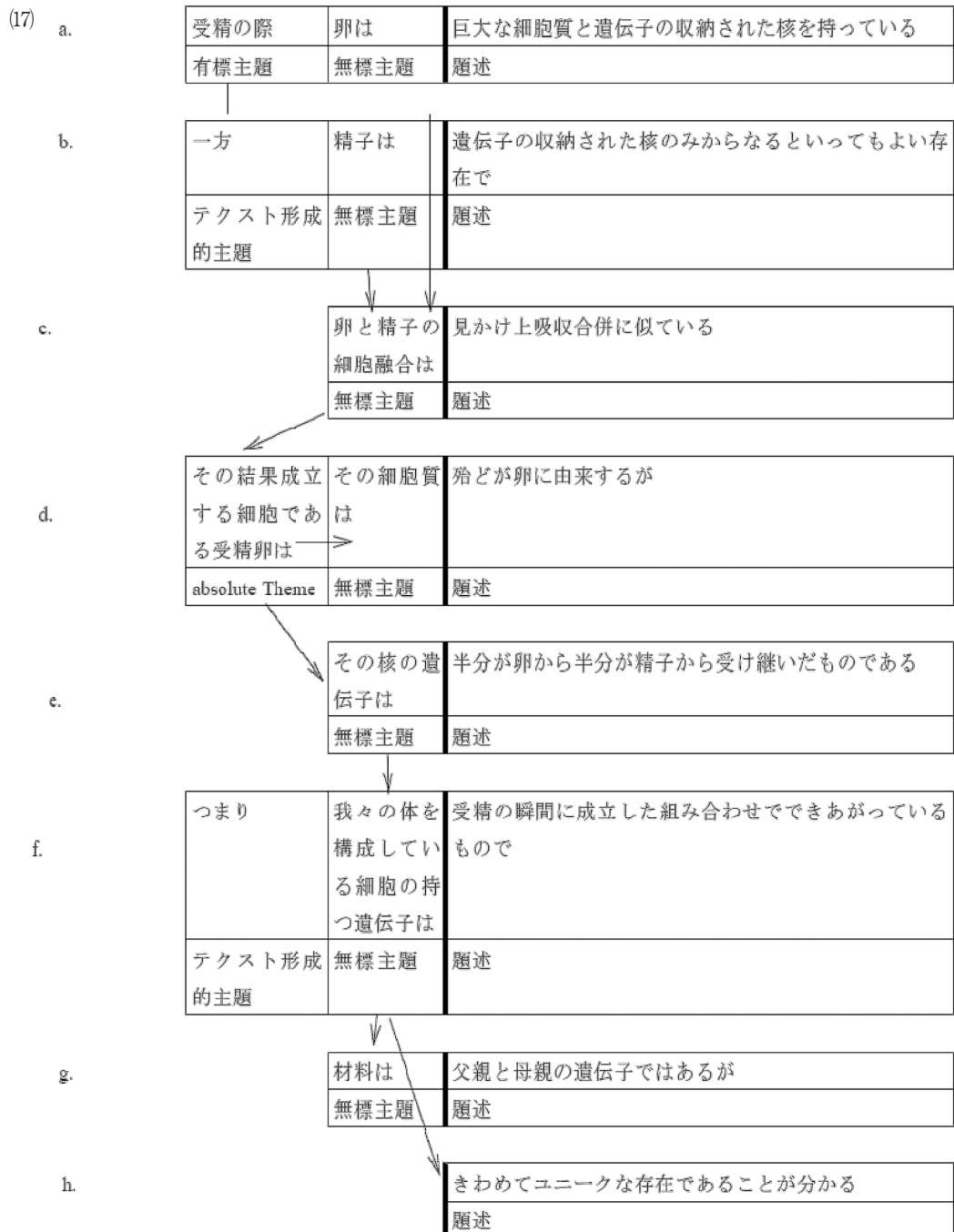
(なお、(16)では、d-e間で4つの節を省略した。)

(17)では、まず(a)の有標主題「受精の際」で、コンテキストが限定され、そのコンテキスト内に「卵は…持っている」と(b)「精子は…存在で」が位置づけられている。このように、有標主題も節境界を越えて主題として機能する。

次に、(d)を見てみよう。最初に「…受精卵は」というabsolute Themeが提示され、この局所的コンテキストに「その細胞質は…由来するが」と(e)「その核の遺伝子は…ものである」という二つの節が位置づけられる。このように、より大きな枠組みの中に、複数の主題－題述構造が位置づけられる場合、(d)「その細胞質は」と「その核の遺伝子は」といった下位の主題は、同時に対照を表すことがある(Fukuda 2006 参照)。

最後に(f-h)であるが、(f)「遺伝子は」がスーブラテーマとなり、(g)「材料は」が帰結テー

マ、(h)は主題が具現していないが「遺伝子は」が影響を及ぼしており、(f-h)は結束していると言える。



以上の観察をまとめる。

- (18) a. 無標主題は、主に話題の提示に関与し、節間に結束性をあたえる。  
 b. 有標主題とabsolute Themeは、話題の提示というよりも、よりグローバルなコンテキストを提示すると考えられる。その際、無標主題との機能差は、節頭に具現されることで生じるものと思われる。そして、そのよりグローバルなコンテキスト・枠組みの影響下に、複数の「主題－題述」という単位をおくことができる。これにより談話の構造化に寄与する。

#### 4. 伝達の単位による分析と動的視点による主題展開パターンの分析

以上の考察においては、便宜上、節を基本単位としていた。しかし、テキスト形成的メタ機能の一つである主題の機能を考察する上では、語彙－文法層の単位である節ではなく、意味層のテキスト形成的意味textual meaningを考察の基礎とすることも欠かせないだろう。実際のテキストにおける主題進行パターンを考える上では、図2に示した基本パターンがそのまま適用されないケースをどう処理するかが問題となる。実際、前節の分析でも部分的に伝達の単位に基づく分析を援用した。ここでは、龍城 (2000, 2004) の伝達の単位という、より意味を指向したテキスト分析と本論文における考察との関係について触れておきたい。

龍城 (2004: 5) は「テキスト的機能 (= 伝達の機能) という観点に立ち、CU という概念を用いると、日本語のテキスト分析は単に節単位で行う必要がなくなり、統語的要素である主語の省略や、節境界の同定という分析を行う必要もなくなる」としており、伝達の単位とは、CUを構成する節に類似した要素、CU構成素 (CUC) すべてに影響を与えるというスーブラテーマ (ST) を中心とした単位である。CUの中では、テーマが形態的に具現されない場合があるが、これはSTが影響を及ぼしており、目には見えないが存在しているという意味で覆面テーマVeiled Theme, VT という。さらに、STから派生したテーマが具現することもあり、この場合は帰結テーマ Consequence Theme, CT と呼ぶ。(19)は筆者によるCU分析であるが、これはSTが3つのCUCすなわち題述Rheme, Rh すべてに影響している例である。(20)は帰結テーマを含むCUの例である。

(19)	「景観」は	ドイツ語のLandschaftあるいは英語のlandscapeの訳語として明治時代に考案された日本語である
	ST	Rh
		現代では、「景色」や「風景」と同じくらい、あるいはそれ以上の頻度で使われている語である
	VT	Rh
		私たちの身のまわりの環境である、都市景観、住宅地景観、商業地景観、街路景観などに人々の関心が向くようになっていった一九七〇年代から、よく使われるようになっていった語である
	VT	Rh

(20)	ハンチントン病は	優性の遺伝病で
	ST	Rh
	原因遺伝子を持つ人は	三〇－四〇歳代になると確実に発症する
	CT	Rh

さらに、龍城(2004: 10)は、CUにおけるテーマ展開パターンについて、(21a)のようにSTから複数のVTが具現するパターンを「無標テーマ展開パターン」としており、それに対して(21b)のようにSTやVTからCTが派生するという展開パターンを「有標テーマ展開パターン」としている。

- (21) a. ST --->VT--->VT--->VT  
b. ST =>CT--->VT... / ST =>CT =>CT

(龍城2004: 11(7a)の図に基づき筆者が編集した。)

CU分析においては、STと関連があるものの同一ではないテーマ、CTを認め、CTも一つのCUのなかに位置づけるという分析方法が提示されており、このことから、龍城が多層的な単位・まとまりを想定していることが窺える。本論文の多重観念構成的主題を認める立場からの主題進行パターン分析も、同様に、テキストのよりミクロなまとまり<sup>3)</sup>における多層的・階層的な構成を捉えることを試みるものである。

前節の(16)においては、「メディア・リテラシーの考え方は」がCUを貫くSTであるが、それに対して、「[二つの方向において] → [第一の方向は] → [第二の方向は]」という主題進行は、「メディア・リテラシーの考え方は」をSTとするCUのなかに、下位のまとまりが存在することを合図していると考えられる。この主題進行については、STから派

生したCTとは言い難いものである。こうした多層的なまとまりを具現するための主題進行・テーマ展開を捉えるには、二重観念構成的主題を認める立場が有効であろう。

## 5. おわりに

本論文では、日本語の主題－題述構造を概観し、動的観点から捉えることにより二重の観念構成的主題をもつ節を認めることとした。そして、二重の観念構成的主題は、それぞれ談話において異なる機能を担うことが、主題進行パターンの分析を通じて観察された。ただし、この機能差については、より多くのテキストの分析による裏付けが必要である。

今後は、主題－題述構造などによって具現される意味層におけるテキストの展開の技法 method of development との関連についても考察に含めていく必要があるだろう。本論文では、龍城(2000, 2004)による伝達的単位に基づくテーマ分析と動的観点による主題進行パターン分析の関係について触れ、より意味的な分析に動的観点を援用しうることを指摘した。

## 例文出典

栗原隆編(2003)『知の地平－大学におけるマルチリテラシーと応用倫理－』東北大学出版会。

## 参考文献

- 浅山佳郎(2003)「階層フォルダモデルによる『は』主題の機能分析」『神奈川大学言語研究』25号。pp.97-116.
- \_\_\_\_\_(2004)「接続詞と主題フォルダの関係について」武内道子編『副詞的表現をめぐって－対照研究－』ひつじ書房。pp.151-174.
- 小泉保編(2000)『言語研究における機能主義－誌上討論会－』
- 佐々木真(1997)「日本語におけるTheme構造」『愛知学院短期大学研究紀要』第5号 愛知学院短期大学。pp.144-158.
- 龍城正明(2000)「テーマ・レーマの解釈とスーパーテーマ－プラーグ言語学派から選択体系機能言語学へ－」小泉(編) pp.49-73.
- \_\_\_\_\_(2004)「Communicative Unitによるテーマ分析－The Kyoto Grammarの枠組みで」『同志社大学英語英文学研究』第76号。pp.1-20.
- 長沼美香子(2001)「日英翻訳におけるThemeに関する課題」*JASFL Occasional Papers* Vol.2 No.1 日本機能言語学会pp.115-127.
- ハリデー、M.A.K. 著、山口登・笈壽雄訳(2001)『機能文法概説』くろしお出版。
- 山口登(1998)「英語における節の主題－選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討－」*JASFL Occasional Papers* Vol.1 No.1 日本機能言語学会pp.103-129.
- (2000)「選択体系機能理論の構図－コンテキスト・システム・テキスト－」小泉編。pp.3-47.
- Andersen, T. (2004) 'The system of THEME in the Danish Clause,' in Banks, D. (ed.) pp. 191-213.
- Banks, D (ed.) (2004) *Text and Texture*. Paris: L'Harmattan.

- Caffarel, A. (2000) 'Interpreting French Theme as a Bi-layered Structure: Discourse Implications,' in Ventola, E. (ed.) *Discourse Community: Doing Functional Linguistics*. Tübingen: Gunter Narr Verlag. pp. 247-272.
- Daneš, F. (1974) "Functional sentence perspective and the Organization of the text," in F. Daneš(ed.) *Papers on Functional Sentence Perspective*. Paris: Mouton the Hague. pp.106-128.
- Davies, M. (2004) 'Two truths... of the Imperial Theme.' in Banks, D. (ed) pp.51-107.
- Fries, P. H. (1995) "Themes, Methods of Development, and Texts," in Hasan, R & P.H. Fries (eds.) pp.317-359.
- Fukuda, K. (2003) "A Consideration of the Thematizer 'wa' in Japanese," in J. Hladky (ed.) *Language and Function*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins. pp. 147-160.
- \_\_\_\_\_(2004) "Theme-Rheme Articulation: A View based on a Comparison of English and Japanese," *Philologica*. LX pp. 63-75.
- \_\_\_\_\_(2006) *Theme-Rheme Structure: A Functional Approach to English and Japanese*. Niigata: Niigata University.
- Halliday, M. A. K. & C. M. I. M. Matthiessen (2004) *An Introduction to Functional Grammar* third edition. London: Arnold.
- Hasan, R. & P.H. Fries (eds.)(1995) *On Subject and Theme A Discourse Functional Perspective*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins.
- Martin, J.R. (1992) *English Text*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins.
- \_\_\_\_ & D. Rose (2003) *Working with Discourse*. London/New York: Continuum.
- Matthiessen, C.M.I.M. (1995a) *Lexicogrammatical cartography: English systems*. Tokyo: International Language Sciences Publishers.
- (1995b) "THEME as an enabling resource in ideational 'knowledge' construction," in M. Ghadessy (ed.) *Thematic Development in English Texts*. London/New York: Pinter. pp.20-54.
- Ravelli, L. (1995) 'A Dynamic Perspective: Implications for Metafunctional Interaction and an Understanding of Theme,' in Hasan, R. & P. H. Fries (eds.) pp. 187-234.
- Teruya, K. (2004) 'Metafunctional Profile of the Grammar of Japanese,' in Caffarel, A., J. R. Martin, & C. M. I. M. Matthiessen (eds.) *Language Typology: A Functional Perspective*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins. pp. 185-254.
- Thomson, E. (2001a) *Exploring the Textual Metafunction in Japanese: A case study of selected written texts*. Ph.D. thesis. University of Wollongong.
- \_\_\_\_\_(2001b) "Theme, T-unit and Method of Development: An Examination of the News Story in Japanese," *JASFL Occasional Papers* vol.2 No.1 JASFL. pp.29-37.

## 注

- 1 本論文は、日本機能言語学会第13回秋期大会（於：東京学芸大学）における口頭発表「日本語の主題－題述構造と主題進行パターン」に基づくものである。第4節は新たに加えたもので、他の部分も加筆修正を施してある。
- 2 Fukuda(2006)は、こうした状況要素が文頭に具現した場合、Frameworkと呼ぶが、「は」によって具現された主題がそうしたFrameworkの後に存在する場合のみ、Frameworkも主題ドメインを構成するとしている。
- 3 ジャンル構造におけるテキストセグメントなどと区別するために「ミクロなまとまり」とここでは



仮に呼ぶこととする。